

| | |
|------------|---|
| Title | 庄谷怜子教授退任記念号によせて |
| Author(s) | 太田, 義弘 |
| Editor(s) | |
| Citation | 社会問題研究. 1996, 45(2) |
| Issue Date | 1996-03-01 |
| URL | http://hdl.handle.net/10466/6742 |
| Rights | |



庄谷怜子教授 近影

庄谷怜子教授退任記念号によせて

時の経過とともに世は移り、人が代わるのが常である。大学もこの世事の例外ではなく、発展のために新しい息吹を吹き込み新陳代謝をしていかねばならない。しかし、教育・研究という独特な組織の中で、余人をもって代え難い役割を果たしてこられた人物の退任には、大きな犠牲が伴うことを実感している。予期されたこととはいえ、組織の維持に連動、苦慮を余儀なくし、また必要な組織の修復に可成りの時間を要するものである。

庄谷怜子教授が、本学の社会福祉学部の前身である大阪社会事業短期大学に助手として着任されたのが、1965（昭和40）年のことである。今になってみれば、先生にとって瞬く間の31年間ではなかったかと拝察している。教育者・研究者としてのみならず、実践者としての長年の任期を終えられ、1995（平成7）年度末をもって退任されることになる。学部の教職員や学生・卒業生はもちろん大阪府立大学にとっても、先生をお送りしなければならないことは、まことに残念なことである。

営々と築いてこられた教育と研究、学部運営の歴史と伝統を継承し、さらに時代を先取りして発展させること、それが先生に後顧の憂いなく、新しい人生と出会いに安心して旅立っていただけるわれわれに課された責務であると自覚している。

先生は、京都大学大学院文学研究科博士課程で研鑽を積み、その後すぐに教育・研究者としての道を一途に歩まれ、ここに無事大阪府立大学社会福祉学部にて研究者としての生活に一区切りをつけられることになる。さらに本年4月より乞われて神戸女子大学文学部に新設される社会福祉学科にて、蓄積された教育・研究者としての識見をそのまま継続し、専任教授として第二の教育・研究生活をお迎えになる予定である。

改めて研究活動の経緯や成果を拝見すると、先生は、終始一貫して貧困問題研究に情熱を傾けてこられた。特に、その研究姿勢は、象牙の塔からの抽象的な論評ではなく、常に調査研究を中心にした実践フィールドからの実証と信念に基づいた活動から業績を積んでこられた。公的扶助制度の研究を中心に社会福祉学の固有性の追究を基本にしながら、他方では ①女性労働、②農山村・過疎地域の生活問題、③被保護世帯、④母子世帯、⑤父子家庭、⑥在宅重度障害者、⑦釜ヶ崎労働者、⑧日雇・高齢者、⑨在日高齢韓国・朝鮮人、⑩野宿者などと貧困問題の全領域を網羅した調査研究

で意欲的な業績を著しておられ、近日それらを集大成した『現代の貧困と公的扶助—要保護層の生活構造を通じて—』を出版される予定である。

それらの研究態度を反映した教育活動にも感銘深い足跡を残してこられた。公的扶助論と生活構造論を中心に学部と大学院にて多くの有能な学生を薫陶し、寝食をともにした研究指導や研究室を中心にした学術研究活動を広げ、大阪府立大学社会福祉学会など、在学生・卒業生から学外まで、公私にわたりその人間性に惹かれて結集する門下生を育て、人材を輩出してこられた成果は、教育者としての証そのものである。

学部の最古参教授として独特な風格から長年リーダーシップをとってこられた。短期大学より学部の新設、大学院研究科の創設に関わり、その間大学評議員として学部や大学行政に重い責任を果たし、また長年図書室長として図書・資料室の充実に奔走され、社会福祉教育界で屈指の図書・資料を擁する施設の整備をされてこられたことも忘れることができない。

教育・研究と実践活動への情熱と行動は、凡人の及ぶところではないが、常に本音での発言、淡泊な人柄、嘘や方便のない実直な方である。そのためか愚痴や流言飛語は一切口にされず、古風な信念の人という風格もっている。反面、人の苦境や痛みを理解できる包容力のある方という実感も深い。それは教育・研究者・実践者としての生活が全てではなく、妻や母親という家庭人としての生活を両立させてこられた人生があつてのことだと拝察している。

これからの第二の人生に向け、健康には特段のご留意をされ、さらなるご活躍を願って止まない。自らが育ててこられた社会福祉学部の発展に、今後とも大所高所からお力添えを切望する次第である。

最後に、改めて一同に代わり深甚の感謝を申し上げますとともに、ここに日頃の研究成果の一端を記念号として刊行し、先生に捧げる次第である。

1996年1月30日

社会福祉学部長 太田 義弘